

巻頭特集

ルース・M・グルーベル新院長 インタビュー

教育とは、生きるかじりの

意味を考える機会をつくるかじり——



関西学院創立以来、初の女性院長が誕生しました。第15代院長、ルース・M・グルーベル社会学部教授がその人です。お忙しいなか、さっそくインタビューに時間を割いていただきました。話題は、関学との出会い、新院長としての抱負、母校の課題、同窓への思いなどさまざま。仕事面だけでなく、趣味、スーパーでの買い物の話、好きな聖書の言葉。締めくくりには、専門の国際関係について、日本とアメリカの望ましいあり方まで、延べ二日にわたり熱く語っていただきました。

初の女性院長、

女性の可能性を広げるきっかけになれば

—— グルーベル院長、おはようございます。今日はお忙しいなか、母校通信のために時間を割いていただき感謝します。早速ですが、このたび関西学院創立以来、初の女性院長に就任されました。まずご感想をお聞かせください。

院長 そうですね、院長の仕事が性別で変わることは無いと思いますが、私が院長を務めることで、女性の可能性を広げるきっかけになれば良いと思います。

留学中に知った、すばらしいキャンパス

一枚の回数券が生んだ新院長

—— ところで院長は関学とどのようにして出会われたのでしょうか。

院長 はい。1991年から二年間、フルブライトの講師として広島大学に來ておりまして、1992年5月に国際問題をテーマにしたインターナショナルセミナーで関西学院にお招きいただきました。初めてこのキャンパスを見て、大変印象に残りました。

関学行きのバスの中で、

教員の方が話しかけてくださって「どうぞ使ってください」と回数券を下さったうえ、キャンパスも案内していただきました。キャンパスに正門から入った時、甲山と時計台と中央芝生が見え、「わあーすばらしい！」と感動しました。

—— 初めて来学された際、関西学院のキャンパスをすっきり気に入られたんですね。

院長 私、本当に幸せだなと思うことは、このすばらしいキャンパスの外国人住宅に住まわせていただいていることですね。緑が多く、環境に恵まれていて、いつも感謝しています。

—— バスの中で回数券をくれた方は、今どうしておられるのでしょうか。

院長 その方は今も学院にいらっしゃいます。文学部の馬場美奈子教授です。

—— そのときの印象がやがて院長と関学を結んだとすれば、一枚の回数券が生んだ院長、というわけですね。

院長 ええ、そうです。

親を通して関西学院宣教師募集を知る 続けたかった日本とアジアの研究

—— 最初の印象はどのように大変良かったわけですが、その後アメリカへ戻っておられて、それがどのようにして関学にお勤めされることになったのでしょうか。

院長 親がかつて、日本で宣教師をしていましたので、関西学院で宣教師をされていた方から「平和に興味がある宣教師を紹介してほしい」と手紙が届いたのです。それを見て、あのすばらしいキャンパスと親切な方々が頭に浮かび、ぜひ

「幸せな出会いでした」

文学部教授 馬場美奈子

グルーベル先生がささやかな出来事を憶えてくださっていたそうで恐縮です。あの日は、インターナショナル・セミナーのお手伝いを英文学科のニュートン先生から依頼され、上ヶ原に向かうバスの中で特別講師のグルーベル先生にお会いしたわけですが、幸せな出会いでした。4年前には、カナダ・セミナーのお手伝いをさせていただいたお返しに文学部開講科目の「異文化理解」をご担当くださり、多人数クラスをきめ細かくご指導いただき感謝でした。初の女性院長としてのお働きに期待しています。お元気で活躍ください。

私自身が行きたいと思いました。

当時私はアメリカの州立大学の教員をしていて、日本について研究したいと思っていましたが、そこにはアジア研究がありませんでした。州立大学なので、授業で宗教的な話をすることも許されませんでしたし。関西学院なら、日本の研究ができるうえ、キャンパスの中にキリスト教があり、私の研究と信仰のどちらも活かすことができると思いました。

社会学部の宣教師・助教授に

—— 国際関係というご専門の研究者としての立場からも日本に関心がおありだったのですか。

院長 はい、そうです。できれば日本、また広くアジアの研究をしたかったのですが、最後に通った大学は、アジア研究ができる大学院が無かったのです。その時、政治学研究科の中でアジア研究をしている先生に、それでは政治学を勉強しては、とアドバイスをいただき、政治学を研究するようになりました。

—— 院長はご主人の転勤に伴い、大学もいくつか変わられたようですね。アメリカでは大学に入り直すことが簡単にできるのですか。

院長 そうです。それまで取得した大学の単位を新しい大学の単位として認めてもらうため審査を受けるのですが、入試のような審査もあります。単位が認定されない場合もあるのですが、できるだけ単位は多めに取りました。

—— 宣教師として来られた関学では授業も持たれているのですか。



院長 社会学部にいらした前任の宣教師の方は授業の中で、平和活動に貢献した人物を紹介したり、戦争について考えた。り、平和についてさまざまなおられました。

私も政治学の中で戦争と平和について研究しましたから、以前の先生とは違う見方かもしれませんけれど、平和に関する授業も担当しました。特に今の時代にとって大変重要なテーマだと思います。

日本の草の根運動を研究

—— その他に関心を持って研究しておられることはございますか。

院長 市民運動や草の根運動の国際性について研究してきました。実際にどのように国際的な視野を持てば良いのか、教育や地域の中でどのように国際性が反映されているのか、

政府の政策や地域の自治体の運動はどのようなものがあるのかなどを調査しました。

関学に来てから特に研究したのは生活協同組合です。なかでも「コープこうべ」はとても国際的な運動をしていて、世界の中でも規模の大きい生協です。そのコープこうべのメンバーの方たちが震災の時にどのように貢献していたかなど、草の根運動と国際性について調べています。

抱負―建学の精神を受け継ぎ

関学スピリットを活かす

―― 院長に就任されての抱負をお聞かせください。

院長 院長は経営的な責任を担う理事長とは違い、キリスト教主義に基づく関西学院の教育の責任を担っています。関学のスピリットを活かす役割と言えらるでしょう。

バランス良く優れた教育・研究を行い、組織として運営をし、関西学院の建学の精神を世界に伝えていきたいと思っています。

「Education for Life」を提唱

―― 院長からご覧になって、どういうものが関西学院のスピリットだと思われませんか。

院長 院長に就任した際、「Education for Life」を提唱しました。「人生」や「命」を大切に作る「全人教育」ですね。それとスクールモットーである「Mastery for Service」(「われらが関学スピリットだ」と思います。勉強に限らず何をするにも一生懸命打ち込み、自分のためだけでなく多方面に貢

献できることが重要だと思います。

―― とても大切なお話だと思いますので、もう少し詳しく伺えたらと思います。

院長 「Life」という言葉にはさまざまな意味があります。が「Education for Life」では主に4つの意味を含めています。「生命」、「共に生きる」、「生活」、「人生」です。「生命」は自分の命の意味を考え、自分が社会や自然界の中でどう生かされているのかを知り、あらゆる命の尊さを理解すること。「共に生きる」というのは、人間を含め、この地球で生きる全ての生き物とどう共に生きるか、ということ。与えられた地球でどうすればより豊かな生活ができるのか。どうすれば共に生きている人々と地球の豊かさを味わっているのか。私たちの行動が地球の反対側に住んでいる人た

「先生は恥ずかしがり屋さん」



伊丹 淳 (H18.社会学部卒)

私達が先生とお会いする時、いつも迎えて下さる笑顔に私達は救われ、日常のイライラを忘れさせてくれ、安心感を与えてくれます。

また、会話をしている時は、完全な聞き手になり、私達の意見を尊重してくださいます。就

職活動中、進路に悩んでいた私が、自分の考えを先生に伝えると、「いいですね」「素晴らしいですね」と同調してくださり、その言葉で私は就職活動を前向きに取り組みました。

この優しさが、先生の魅力のひとつです。

もう一つの魅力は、「恥ずかしがり屋さん」の性格です。ゼミ旅行などで一緒に写真を撮ろうとすると、「私なんか……」と照れられ、また、新聞に掲載された先生の記事の話をする時、「まあ、恥ずかしいわ」とおっしゃいます。こんな時、失礼ですが、私達には可愛らしく感じ、先生をお慕いする点でもあります。

先生が校内の他学生にも、校外の一般の方にも私達と同じように笑顔で、平等に接しておられるのは尊敬するところです。

このような素晴らしい先生の新学院長への選任は当然のように思えます。先生のご活躍を心より楽しみしております。

ちにも影響を与えていることを知り、私たちの行動に責任を持ち、できるだけ協力し合う方向へ進んでいく、それが「共に生きる」ということですね。

「生活」というのは、発言する力、判断する力を意味しています。自分で情報を集め、研究し、判断を行い、発言したり、文章で表現する、そういうスキルがどのような仕事や立場でも生活していくために必要だと思っています。日本語以外の言葉も使ってそれを表現できれば、さらにすばらしいと思いますね。今は地球が狭くなってきましたから。

最後に「人生」ですけれども、卒業する時に学習をやめるのではなくて、学ぶことに対して常に喜びと希望を持っていただきたいのです。教育は、ある年齢の時だけのものではなく、生涯を通して続けるものということを知っていただきたいと思っています。

社会人セミナーで「再学のススメ」

—— 続けることによって、また新たに次の喜び、次の希望を持つというのは大事ですね。近年関学ではもう一度勉強したいという卒業生や社会人のために、いろいろなセミナーが用意されているのですね。福沢論吉に「学問のススメ」という著書がありますが、いわば「再学のススメ」ですね。

院長 勉強する期間というのは決まっています。十代、二十代の時だけでなく、いつでも新しいことを学ぶ喜びを感じてもらいたいです。私自身、週に何時間か子供を保育園に通わせながら大学院で勉強を続けましたが、それはとても良い経験になりましたよ。



関西学院には社会人入学制度、公開講座や聴講生制度など、「社会人の学び」を支援する環境が整っていますので、卒業後もぜひ関学で学んでいただきたいと思います。

—— 他にやりたいと思っておられることは…。

院長 今関学には4カ所のキャンパスがあります。西宮上ヶ原、神戸三田、大阪梅田、東京丸の内です。どのキャンパスでも、自分は関学にいるんだという事を感じられるようにしたいと思っています。単純なことですけど、今できるだけ各キャンパスのチャペルに参加させてもらっています。また中学部や高等部のチャペルにも参加しています。皆さんと一緒に時間を過ごす、みんなと共にいる、そこから生まれる意味もあるのではないかと思います。

—— 関西学院の課題を教えてください。

院長 授業をより魅力的なものにする努力を絶やさないことが大切です。また国際学会で報告する方たちも大変多いのですが、これからも国際的に認められる研究活動を

さらに広げていきたいですね。

社会人の経験を学生に伝えてほしい

—— 母校通信を通してOB・OGに望まれることや期待されることをごいしましたら。

院長 まず、今、関学が何をしているかを知っていただいで、アドバイスをいただきたいですね。それから社会に貢献されている卒業生の皆さんに、関学での教育や経験を今どのように活かしておられるのか、こういうことができたら良かったと思うことは何か、そういうことをぜひ教えていただきたいです。また、時代は変わってきていますが、関学の中で変えてはいけないこと、変えなければいけないことを卒業生の



視点からアドバイスしていただき、改善していきたいと思っております。ですので、多面的に応援していただければと思います。たとえば私のゼミではOBやO

「いただいた色紙は宝物」

佐伯麻衣子 総合政策研究科総合政策専攻博士前期課程



先生はとても穏やかで、お優しく、一緒に居るとこちらの気持ちも優しくなれる方です。私たち学生の意見を積極的に取り入れてくださった2年間の研究演習は、とても充実したものでした。私が大学院進

学について悩んでいた時も、親身になってアドバイスをしてくださり、今もよく相談にのっていただいています。卒業式の後、ゼミ生一人ひとりにメッセージの入った色紙をくださった事が一番の思い出で、その色紙は私の大切な宝物です。先生にいただいたメッセージを見ると、落ち込んだときも頑張ろうという気持ちになります。

私は現在大学院生として研究する傍ら、高等学校で講師として働いていますが、「Mastery for Service」の精神とグローバル先生がおっしゃられている「Education for Life」をいつも念頭に置き、生徒一人ひとりと接しています。先生から受けた「こころを育む教育」と同じように、今、私の周りにいる一人ひとりの生徒が「思いやり」や「優しさ」を持つ人間になれるような教育活動に携わっていくことができればと思っています。

Gの方たちに来ていただいて、時々お話していただいています。私より先輩の話のほうが直接通じることもあります。いろいろな知恵を分けてくだされば、学生もとても勇気づけられると思います。

OGからもお話を聞く機会を

—— 女性の卒業生が増えています。OGに何かお伝えになりたいことはございますか。

院長 今の女子学生にとって、関西学院を卒業した後、どんなことができるのかを知るうえでOGはとても大事な存在だと思います。今の学生に、卒業後どういうことができるのか、仕事と家庭の両立のバランスはどうされているのかなど、いろいろ教えていただきたいですね。

—— 男女を問わず、卒業生の皆さんにお伝えになりたいことがございましたら。

院長 関西学院を温かく応援してくださっていること、とても感謝しております。

好きな言葉は

「Today is the first day
of the rest of your life」

—— ホームページで今年の入学式での院長の式辞を拝聴しました。その中に「関学チャンス」という言葉がありました。が、どういう意味でしょうか。



院長 関学にいる間にしか経験できないことを大事にしたいという意味です。授業はもちろん、いろいろな活動やイベント、講演が関学では毎日のように行わ

れています。ただ授業に出てすぐ帰るといのは本当にもつたいないと思います。授業だけでは「関学」が身に付かないと思います。キャンパスに来て、この環境を味わってほしいですね。

アメリカには「Today is the first day of the rest of your life」という言葉があります。きのうはいろいろな失敗があつたけれども、きょうはまた新たな出発の日、毎日を大切に、して新たな旅立ちをしてほしいですね。

同窓会では卒業生の熱い思いに感激

—— ところで、同窓会に参加されたそうですか。

院長 卒業後何年たつても関学をこれほど愛してくださっている人たちがたくさんいらっしゃることを直接知ることができ、とてもうれしく思いました。また在学生をいろいろ応援してくださっている方々のお話も聞かせていただいて、感動しました。この夏、上海の支部総会に出席させていただきました。上海はランパス先生のゆかりの地でもあり、とても楽しませていただきました。同窓会では皆様から親切に声をかけていただいて、本当に感謝しています。

外から見つめ直す

自分のアイデンティティ

—— 院長は国際関係がご専門です。私たち一人ひとり「世界の中の日本」の視点を持たなければならぬ時代が来ていると思いますが、特に海外で活躍している同窓生にメッセージを贈ってください。

「千刈キャンプのこともご存知で…」



村手 貴子 千刈リーダーズクラブヘッドコーチ
 グルーベル先生とお話をしてなんですが「正直
 院長先生になられる方はとってもおかたい人だ
 と思っていました。私たちが普段活動している千
 刈キャンプのことを知っておられて驚きました。
 クラブで実践しているMastery for Serviceについ
 てもお話できてよかったです。」

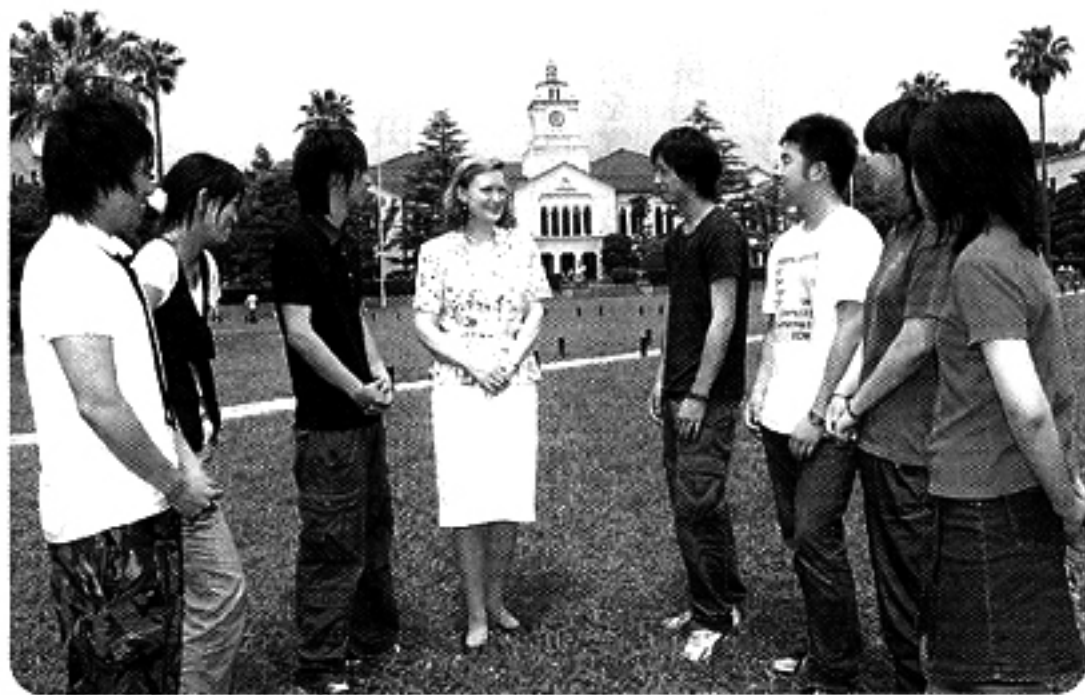
のも大きな収穫ですね。外を理解することは内を知ること
 でもあります。既にその経験のある人には、積極的にそこか
 ら学んだ事を周りの人に伝えてほしいと思います。
 学院創立者のランバス先生は「世界市民」といわれていま
 すが、世界で活躍中のOBやOGの方たちは、まさに「世界
 市民」として、今おられる国でさまざまに関学スピリットを
 活かしておられると思いますね。

**教育とは 生きることの意味を考える
 機会をつくること 命の大切さを知ろう**

—— 話題は変わりますが、院長は教育に携わっておられ
 て、日本の今の社会状況、教育などについて、どう感じておら
 れますか。

院長 外から日本を見ることをせ

ひ経験してもらいたいですね。一度
 海外に出てみなければ見えないこ
 とがあります。自分の国との違い
 だけでなく、似ているものを見つけ
 ることもあります。それはお互い
 を理解するのに、とても役に立つ
 と思います。また、外国に行つて異
 文化を経験し理解することも必
 要ですけれども、海外へ出ると、自
 分は何を信じ、どういう人に自分
 は支えられてきたのか、というアイ
 デンティティーを知ることができ



院長 教育と

は、生きるこ
 とは何である
 か、という
 ことなのかを
 考える機会を
 与えてくれる
 ものだと思
 います。まず自
 分の命の大切
 さを知り、私
 たちの周りの
 自然や人々を
 大事にする、
 そういうこと

を教える教育が必要だと思ひます。物事を客観的に分
 析するだけではなく、命を味わいながら、文化が命の
 大事な現れであることを教育の中で学ぶことが必要で
 しょうね。
 —— 命を味わうというのはたとえばどういうことなので
 しょうか。

院長 そうですね。関学ではキリスト教主義教育によつて、
 必ず命ということを考える機会があります。いろんな活動
 や授業の中で、自分の役割や自分が生きていることにより、
 何ができるのかということをも学んでもらいたいと思ひます。
 特に中学部や高等部では、そういう問題が本当に大切にさ

れていると思います。大学でも、もちろんキリスト教とていう必修の科目やチャペルがあり、宗教主事の先生方はそういうことも教えていらつしやいます。

定番は納豆オムレツ

——このあたりで少しプライベートな話題に……。休日はどうのように過ごしておられますか

院長 買い物や美術館、博物館巡りをしています。

——大阪や神戸にお出かけになることが多いのですか。

院長 最近、尼崎にあるアメリカの雰囲気を持ったスーパーマーケットに気分転換によく行くのですが、アメリカの味がいろいろあつて楽しいです。もちろん日本の物も買いますよ。例えば毎週納豆を買っています。小さいころは納豆をあまり食べませんでした。よく皆さんから「納豆はどうですか」と聞かれるので、試してみるとおいしくて。今は毎週、納豆オムレツを作っています。

——最近美術館や博物館に行かれましたか。

院長 神戸市立博物館で、大英博物館の古代エジプト展を見ってきました。また、この間は大阪市立美術館でフランスから里帰りした浮世絵版画を見ました。北斎、写楽、歌麿などの浮世絵は技術的にも大変優れていて、とても美しかったですね。

ガラテヤの信徒への手紙 5章13節

——院長は宣教師ですが、お好きな聖句は。

院長 ガラテヤの信徒への手紙 5章13節「兄弟たち、あ



なたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。」ですね。

自由のことが書いてあります。私たちには自分でいろいろ選ぶことができる自由があります。これはとても大事なことです。周りの人たちに役に立つようなことを選ぶ自由があるということです。それは愛を基盤として責任を持つことだと思えます。

子供のころ、自然に覚えた日本語

——こうしてお話を伺って、びっくりするのは、先生の日本語が非常にきれいなことなのですが、どういうふうにご日本語を覚えられたのですか。

院長 自然にですね。子供のころ豊田や浜松にずっと住んでいましたので、近所の友達と走り回りながら……。今も続けて勉強しています。

——院長に日本語を教えられる先生はどんな方なのでしょう。

院長 茨木由紀子さんとおっしゃって、英語もおできになる

Profile

院長プロフィール



1950年、アメリカ合衆国ミネソタ州生まれ。宣教師の両親と共に来日し、2歳から17歳までのほとんどを日本（東京、浜松、名古屋、豊田）で過ごす。大学入学のため帰国しネブラスカ大大学院修了（政治学博士）。ウイスコンシン大教授を経て1996年に関西学院宣教師、関西学院大社会学部助教授に就任。1998年教授。政治社会学、国際問題演習、キリスト教と近代思想などの科目を担当。国際交流部副部長として、関学の国際交流活動の推進に尽力。全教職員の選挙によって、第15代関西学院院長に選出され、2007年4月から就任（任期3年）。



ご家族との写真（一番左端が院長）

関西学院の卒業生の方です。

—— ご専門が国際関係ですね。今、日本とアメリカは非常に仲が良いわけですが、日米はどう付き合っていけば良いのでしょうか。

院長 日米はよく知っているようで、知らない関係だと思えます。もっと親しく理解し合う必要があります。アメリカは日本をもっと尊敬し、もっと理解をしなければいけないと思えます。日本語を勉強しているアメリカ人の学生も増えていますが、一般的にはまだ日本について知らない人が多いので、もっと良く知ってもらいたいですね。また日本も、日本がどういうことをやり

たいのか考えて、決断してほしいですね。アメリカに影響されていることは

確かですが、日本は文化的にも商業的にも政治的にも、アイデンティティをしっかりと持たなければいけないと思えますね。—— という日本がみんなのために良いのか、それをどう実現するのかを日本で考えてもらいたいですね。

そして、それを世界に訴えていけば、日本もそれに対して誇りを持つことができると思います。

—— 二日にわたって貴重なお時間いただき、素敵なお話を聞かせていただきました。ありがとうございます。

「いつも光の当たらない人々の事を考えて」

茨木由紀子（S43 文、英文科卒）
院長の裏話でもと思ったのですが、まったく表も裏もない方です。クリスマスにはとてもおいしいお手製のクッキーを守衛さんにプレゼントされたり、ホームレスの人達が売っている雑誌は努めて買われるなど、いつも光の当たらないところにいる人々の事を考えて生活していらっしゃいます。また、ご主人のマイクさんとのコミュニケーションのよさにも驚いてしまいます。お互いを思いやる温かい家庭が院長の支えなのでしょう。

